

主 題：救われた者への神の祝福 3

聖書箇所：ローマ人への手紙 5章3－5節

苦しみや様々な困難、患難を感謝することは大変難しいことです。正直言って、私たちはそのようなことを避けて通りたいと願います。私たちが望むことは、そのような困難や苦しみ、悲しみや痛みが全くない生活です。しかし、パウロたちは違いました。彼らはそのような困難や患難、苦しみ、痛みのすべてを神に感謝したのです。パウロは私たちに、なぜ、それがすばらしいことなのか、なぜ、私たちはそのようなことを感謝できるのか、そのことを私たちに教えているのです。もちろん、神が与えてくださったすばらしい祝福を覚えてそれを感謝することはだれにでも出来ることです。私たちは「救われた者に与えられた三つの祝福」を見ました。1. 神との平和、2. 神との交わり、3. 神の栄光、です。それを喜ぶことは簡単です。しかし、パウロはそれと同じように信仰ゆえに与えられる患難を喜んでいました。なぜ、喜ぶことが出来たのか、そのことも私たちはすでに見て来ました。それは彼らが患難の目的を知っていたからです。何のために神は私たちに患難をお与えになるのか、そのことを知っていたのです。二つの目的を見ました。一つは「患難によって信仰の真実さを明らかにする」こと、本当に救われているのかどうかは患難を通して明らかになるということを見ました。もう一つは、実は、「患難は信仰の成長をもたらす神の手段」であることを見ました。神のすばらしさを学ぶ大切な機会です。また、神がどんなに偉大ですばらしい方であるかを知る機会です。患難は信仰の成長をもたらす大切な機会です。私たちの信仰が成長するようにと、そのことは神が望んでおられることです。ペテロがⅡペテロ3：18で「**私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。**」と言いました。これは神の命令です。クリスチャンの皆さん、あなたの信仰が成長することを神は望んでおられるのです。命じておられます。これは非常に大切なことです。なぜでしょう？あなたの信仰が成長すればするほど、あなたは神の栄光をよりすばらしくこの世に現わして行くからです。

また、私たちの信仰が成長することによって、神が私たちイエス・キリストを信じる者たちに約束された祝福を、ただ頭だけでなく、実生活において経験しながら歩むことが出来ます。実は、そのような祝福を経験していないクリスチャンがたくさんいるのです。神の約束があり、神の祝福が約束されている、でも、多くのクリスチャンはその祝福を経験することなく、日々を過ごしていることが多いのです。あなたの信仰が成長すれば、神の栄光が現われるだけでなく、より神のすばらしさが世に証されるだけでなく、あなた自身の喜びが増し、あなた自身の信仰生活が変わって行くのです。神の恵みと祝福を経験しながら、この地上を歩むことができるし、神とともに永遠を過ごすことができると言うのです。この大切な信仰の成長、これは神が助けてくださると聖書は教えています。Ⅰコリント3：6には「**私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。**」とパウロが言いました。

確かに、神が信仰の成長を助けてくださるのですが、実は、私たち信仰者にも大きな責任があるのです。信仰者一人ひとは「私はもっと成長したい」という、そのような思いを持つことが必要です。そして、それゆえに、成長するために必要な正しい選択を行なって行く責任があります。なぜなら、皆さん、母親がどんなに栄養のある美味しいものを作ってくれても、それを食べなければ実際の栄養になりません。それを食べようと決めて自分の口に運んで食べなければ力にならない。それと同じように、みことばを学び、そのみことばを実践することを通して私たちの信仰は成長して行くのです。私たちはそのように歩んで行く決心をし、そのように歩み続けて行くことが必要なのです。でも、皆さん、あなたの信仰が成長するために、みことばを学びそれを実践することは確かに必要なことですが、パウロが教えていることは、私たちが毎日の生活で経験する様々な患難のことです。ここで説明を加えておきますが、この患難はあなたが神の前を正しく歩んでいるゆえに経験するものです。あなたが罪を犯したために経験する苦しみとは違います。罪ゆえに経験する様々な苦しみについて神が望んでおられることは、その罪を悔い改めて正しく歩み始めることです。しかし、あなたが神の前を正しく歩んで行くとき、あなたはいろいろな困難、いろいろな摩擦を経験します。なぜなら、私たちの住んでいる世は大変な異教の国だからです。この国ほど神に逆らい続けている国は他にありません。私たちが愛するこの国、これ程神に逆らい続けている国は他に類を見ないと言ってもいいでしょう。私たちは全く異教の文化の中に生きています。私たちがこれまで生きて来たその歩みは神を喜ばせないことばかりでした。そのような中でイエス・キリストを信じた皆さんが、正しい歩みをして行こうとするなら、間違いなく摩擦が生じて来ます。そのことを言っているのです。

確かに、このような異教の国であり、神に逆らい罪の中を歩んでいる私たちの国ですが、その中で信

仰者としてみことばに従って歩いて行こうとするなら、様々な苦しみを経験します。もしかすると、それは家族から来るかもしれません。親族からかもしれません。ご近所から来るかもしれません。同僚から、友人から来るかもしれません。どこからであっても、信仰者として正しく歩いて行く者を妨げる働きは出て来るのです。そのような患難についてパウロは語っているのです。実は、患難は私たちの信仰の成長のために必要なのだと言うのです。パウロはそのことをだれかから聞いて語ったのではなく、彼は実生活を通してそのことを学んだはずで、なぜなら、彼は様々な患難を経験していたからです。

イエスを信じた後のパウロは大変な困難を経験し続けました。その中であって彼が学んだことは、実は患難も私には必要である、なぜなら、その患難を通して私の信仰が成長するということです。患難による信仰成長の過程、そのことを私たちはこの5節のパウロのメッセージを通して教えられます。

☆患難による信仰成長の過程 3－4節

5：3－4「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、**4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。**」

1. 忍耐を生み出す 3節

一つ目にパウロが教えていることは3節「**患難が忍耐を生み出し、**」と、ここで、実は、患難によって信仰が強められて行くということなのです。患難を通して私たち信仰者の信仰が強められて行くと言っているのです。主に対して敬虔に歩もうとするときに、主のみことばに忠実に歩もうとするとき、私たちはいろいろなことを経験します。その経験はどちらかというとう嬉しくないもの、悲しい辛い経験です。でも、そのような中であって、一人ひとりがしっかりと主を見上げて歩いて行くなれば、そのすべてのことを通して、実は、あなたは大切なことを学んで行くと言っているのです。「**患難が忍耐を生み出し、**」と、この「**生み出す**」と言う動詞は「生じさせる、引き起こす、もたらす」という意味をもったことばです。パウロは患難が「あること」を生じさせる、困難が「あること」をもたらす、患難が「あること」を引き起こすと言っているのです。何を引き起こし、何をもたらすのでしょうか？それは「忍耐」です。このことばは新約聖書の中に32回出て来ます。私たちがはっきり理解しておかなければいけないことは、ここで言われている「忍耐」は、人に対する忍耐、人に対して寛容であり続ける、怒らずに忍耐をもって寛容でありなさい、忍耐をもって辛抱しなさいとそのような意味ではありません。ここで使われていることばは、そのように受け身的な意味ではなく、どんなに大きな問題であろうと大きな困難であろうと、その問題から逃避するのではなく、その中であって恐れることなくしっかりと主を信頼しながら歩み続けて行くという、そういう意味での忍耐です。というのは、このことばの意味をもう少し見ると、パウロが言いたかったことが見えて来るからです。

ジョン・マレーという神学者はこの「忍耐」ということばは「耐え忍ぶ、ぐらつかないで忍耐して待つこと。持久力、または、思想堅固である。」と言います。つまり、自分で決めたこと、自分が信じていることを堅く守り通して行く、それが忍耐なのです。だから、そこで立ち止まっているのではないのです、後ずさりするのでもないのです。続けて前に進んで行こうとする、そのような意味だと言うのです。ですから、私たちが考える「忍耐」とは少し違います。パークレーは、またこのような説明を加えます。「このことばはいろいろ事柄に単純に耐えることではなく、人がそれを喜んで迎え、それを克服することが出来る力である」。様々な患難に対してそれを喜んで迎え、しかも、それを克服することが出来るようにする力、それがここで「忍耐」と使われていることばの意味だと言います。益々、私たちが考えている「忍耐」とは違うことが分かって来ました。もう一つ、パークレーはこのように言っています。「このことばは、屈服して洪水に押し流されるような精神ではなく、胸を張って事に対処し、それに打ち勝つ精神である。」と。つまり、信仰者として私たちはみことばに忠実に従って行こうとしますが、そうするといろいろな摩擦が生じます。「忍耐」はその中であって「その問題から逃げ出そう」とするのではなく、その中であって、しっかりと主を見て「私はあなたを信頼します。私には大変なことがあって、これから先も何があるか分からないけれども、あなたを信じてこれからも続けて従って行きます。」と言うのです。それがここでパウロがここで言っている「忍耐」ということばの意味です。

実は皆さん、確かに、聖書には迫害の中でもこのような忍耐をもって生きた信仰の先輩たちがたくさん描かれています。例えば、テサロニケの教会です。Ⅱテサロニケ1：4「**それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。**」、「**あなたがたがすべての迫害と患難とに耐え**」ていると言います。パウロはそのことを知っていました。テサロニケのクリスチャンは大変な苦しみ大変な迫害を経験し、大変な患難の中にいたのです。その中であって彼ら兄弟姉妹たちはそれに耐えながら、なおも従順に歩み続けようとしていたのです。神の前に正しく生き続けようとしたのです。そのことを知ったパウロはそれでこのように言ったのです。「私はあなたたちのことを誇りに思う」と。パウロが生きたように彼らも生きていたのです。問題の中にあっても怯むことなく、みことばに従い続けて行ったのです。そのような忍耐をもって生きた人々がい

たのです。

また、マケドニアの教会の信仰者たちのことが、コリント人への手紙第二に出て来ます。マケドニアは今のギリシャの北部に当たります。彼らは信仰ゆえの苦しみだけではなく、大変な貧困も経験していました。Ⅱコリント8：1-2「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。：2 苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」、このみことばが教えるように、マケドニアのクリスチャンたちも信仰ゆえに大変な試練、大変な苦しみに会っていました。ところが、その中であって彼らは何をしたのでしょうか？彼らは怯むことなく益々主に対して従順に歩み続けたと言うのです。これが忍耐なのです。そして、そのように歩んだ彼らを神が用いて神のすばらしいみわざを為したとパウロは言っているのです。ですから、1節でパウロは「神の恵み」と言っています。このような人々を神は祝して、彼らのうちにすばらしいわざを為されたと言うのです。どのようなわざでしょう？神は彼らのうちにすばらしい喜びをお与えになったのです。「彼らの満ちあふれる喜びは、」とあります。困難の中で彼らは喜んでいたので。パウロが言ったように「この上もない喜び」を彼らは実際に経験していました。また同時に、神は彼らのうちに働いて、神への愛、そして、感謝を増し加えてくださっています。なぜ、そのように言えるのでしょうか？「その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。」とあるからです。私たちには考えられないような貧しさの中にあっても、彼らは神を愛するがゆえに、喜んで、すべてを神にささげ続けようとしたと言うのです。神への深い愛です。「なぜ、私をこんな苦しい目に会わせるのですか？」、「なぜ、こんなに貧しいのですか？」とも言っていません。彼らは神に感謝しているのです。これらのことは彼らの生き方が明らかにしています。神はすばらしいみわざをこの愛する人たちのうちに為したのです。それは彼らが忍耐をもってその困難の中を歩んだからです。その患難の中にあっても彼らは継続して主を見上げて、その主に信頼を置いて歩み続けたからです。

ということは、皆さん、確かに、あなたもいろいろなことを経験しておられます。しかし、その試練の中にあっても、患難の中にあっても苦しみの中にあっても、不信仰によって神に逆らうのではなく、その大変な中でしっかりと主を信頼して歩み続けて行くことができるのです。立ち止まるのではなく、主を信じて歩み続けて行くのです。怯まずに歩み続けて行くのです。その忍耐があなたの信仰を変えて行くのです。あなたの信仰は成長して行くのです。ヘブル人への手紙の著者はこのようなことを言っています。ヘブル12：1「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」、著者は非常に面白いことを言いました。イエスを信じた私たちは神に従って行こうとしますが、その歩みを妨げようとする働きも実際に働くのです。「そんなに熱心に歩まなくてもいいでしょう。そんなに真剣に歩まなくてもいいではありませんか？そのように摩擦ばかり起こるのなら、もう少し妥協してもいいでしょう？もう少し上手に世渡りの術を学んで行くほうがいいと思いますよ」と。パウロはそのようには生きなかつた、ペテロもそのように生きなかつた。今、私たちが見て来たように、テサロニケのクリスチャンも、マケドニアのクリスチャンもそのようには生きませんでした。彼らがしたことは、確かに、摩擦があろうとどんな問題があろうと「自分の責任はこの主に對するものだ」と言って主に従い続けたのです。そのことをこのヘブル人への手紙の著者も同じように言っているのです。私たちがそのように神に従順に忠実に歩み続けて行こうとするとき、その歩みを妨げるものを著者は「罪」と呼んでいます。忠実な歩みを望まない働き、望まない力が存在するのです。信仰者であるあなたが神の前を忠実に生きて行こうとすることを望まない力が存在するのです。

それに対して私たちはどのように対処しますか？「そんな辛い生き方をするよりももっと楽な生き方をすればいい」と、日本人はそのことが得意です。だれにでもいい顔をして八方美人です。でも、信仰者の皆さん、私たちが信仰者として覚えなければいけないことは、私たちの選択を人がどう見るかではない、神がどう見られるかということです。私たちの選択をご覧になっている神が、そのことを喜んでおられるかどうかです。なぜなら、私たちはいつかその方の前に立つからです。そのときにその方が私たちがをさばかれるときに言われることは何でしょう？「わたしに忠実であったか」、「不忠実であったか」のどちらかです。しかし、驚くべきことは、あなたが信仰ゆえに経験する様々な困難も、実は、神があなたに与えてくれたと言うのです。神はすべて分かっておられるのです。あなたの困難もあなたの悲しみも苦しみも神はあなたが成長するために敢えてそれを与えておられるのです。ですから、私たちの責任は、そのような生き方をしないように、妥協して生きるようなその罪を捨てて、しっかりと主を見上げて正しく歩み続けて行くことだと言うのです。「信仰者はそのように生きて行こう」と。

あなたはいかがですか？あなたは毎日の生活において妥協せずに信仰の戦いを戦っていますか？「患難が嫌だから、困難が嫌だから、悲しみも辛いことも嫌だから、だから、少しぐらい妥協しても…」と、

そのように間違っただけを選んでいませんか？神が喜んでくださる歩み、それは患難の中にあっても、しっかりと主を見上げて正しく歩み続けて行くことです。みことばに従い続けて行くことです。そのことを本当に学ぶのは患難にあったときです。なぜなら、私たちは問題がなければ神のもとに真剣に行かないからです。問題を経験すると、私たちは神に助けを求めます。自分ではどうすることも出来ないことに気付くからです。神が私たちに様々な患難を与えてくださるということは、私たちに神の助けが必要だということを私たちがしっかりと悟るためです。このことはまた後で触れます。だから、「妥協するな」、「しっかりと主を見て、主に従い続けて行きなさい」、そのときにあなたの信仰は成長して行くと言うのです。

2. 忍耐が練られた品性を生み出す 4節

二つ目は、4節にある通り、この忍耐が「練られた品性を生み出す」と言います。つまり、あなたがそのような歩みして行くなら、あなたの信仰は成長し、同時に、あなたは主に似た者へと変えられて行くと言っているのです。どんな時にも主を見上げて主に従って行くなら、あなたは変えられて行くのです。主が喜んでくださる人に変えられて行くのです。主の栄光を現わす人へと変えられて行くのです。あなたの信仰が成長するのです。そのために必要なことは、忍耐をもって主のときを待ちながら生き続けることです。どんな時にもみこころに従い続けて行くことです。正直に言って、神の最善を信じて待つということは大変難しいことです。でも、皆さん、あなたが神の前に「私は、あなたのみこころに従いたい。あなたのみこころのときを待ってそのように歩んで行きたい」とそのように願い、そのように歩んで行くときに、少なくとも皆さんはこのことを学んでいるはずで、確かに、神のみこころに従うことが最善であるという確信が強められているはずで、そのように生きたときに、そして、神のみこころに従ったときに、私たちの確信は増しているはずで、「その通り、神のみこころに従って生きることが最善だ」と、そして、「神が約束されていることが、本当に私たちにとって一番素晴らしいものだ」と、そのことを私たちは学んで行き、同時に、私たちの神は絶対に約束を破らない真実な方だという確信が増してきます。

もし、あなたがみこころに忠実に従い続けて行くなら、神のみこころのときを忍耐をもって待ち続けて行くなら、みこころに導かれて歩んで行くなら、あなたは確実にそのレッスンを学んでいるはずで、主に対する確信が増しており、そして、みこころ以外のものはもう求めないのです。なぜなら、これにまさる喜びはもう無いからです。そのような人に変えられて行くのです。ですから、パウロはここで「**練られた品性**」と言ったのです。「**練られた**」というのは「精錬」のことです。金属の純度を高める行程です。いろいろな不純物を溶かして浮き上がらせることによって、その金属をより純度の高いものに変えていく精錬です。パウロが言っているのはそのことです。金属の精錬でなくて信仰の精錬なのです。旧約聖書のゼカリヤ書の中に13：9「わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためすように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは「これはわたしの民。」と言い、彼らは「主は私の神。」と言う。」とあります。銀がその純度を増すために精錬するのです。金がその純度を増すために精錬するのです、溶かして不純物を除くのです。神はそのことをあなたの生活に為す、信仰の精錬を為すと言っているのです。イザヤ書1：25には「**しかし、おまえの上に再びわが手を伸ばし、おまえのかなかすを灰汁のように溶かし、その浮きかすをみな除こう。**」とあります。神はあなたの信仰を精錬してその信仰の中にある不純物を取り除かれる、そのような働きを為すと言うのです。

「**練られた品性**」、神が何を為されるのか、あなたの品性を変えようとするのです。あなたの人柄を変えようとするのです。あなたの行動、あなたの考え方、あなたのすべてを変えようとするのです。そのすべてがイエス・キリストに似た者へと変わって行くようにと神が働いておられると言うのです。ですから、神がなさることは、信仰者である私たちからその不純物を取り除くこと、私たちが本当に心から神を信頼する者になるために、不信仰を除いて行くことです。私たちがことばにおいても行ないにおいても、性格においても、主に似た者、主の栄光を現わす者へと神は私たちを変えようとしているのです。だから、私たちはそのような働きを為して下さっている神に信頼を置いて歩むことが必要なのです。皆さん、先ほどから見ているように、神は目的をもってあなたを変えて行こうとしておられるのです。あなたがより神に喜ばれる者になって行くように、神はあなたのうちに働きを為して下さっているのです。そのために必要なことは何でしょう？Ⅱコリント12章でパウロは証をしています。皆さんよくご存じのように、パウロは自分のとげを取り除いてくれるように三度主の前に祈ったと言っています。おそらく何かの病気だったのでしょう。それを去らせてくれるように祈ったと。パウロが考えたことは、それが除かれるなら自分はもっと主に役立つ者になる、もっと主に用いられる者になるということでした。そのことを神の前に求めたとき、神の答えは12：9-10「**わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。**」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。：10 ですから、私は、キ

リストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」でした。私は信仰のゆえに、キリストのために大変な苦しみを経験しているけれど、それを喜んで受け入れるとパウロは言っているのです。なぜなら「私が弱いときにこそ、私は強いからです」。先ほど見たように、そのように様々な困難は私たちがどんなに弱者であるかを私たちに悟らせてくださる機会だと思いませんか？悲しいことに、私たちは何でも自分の力で出来ると過信しています。でも、私たちは何か壁にぶつかったとき、自分は全能でないことに気付くのです。自分には出来ないことが多くあることに気付くのです。私たちがあくまで被造物に過ぎないことに気付くのです。そして、私たちは全能者である神を見上げるのです。「助けてください！」と。

神が働かなければ神の栄光は現わされないのです。では、神が働くためには私たちはどのようにしなければいけないのでしょうか？私たちが神に働いていただくことを選択しなければいけないのです。「私がやります、私の力、私の知恵でできます。」ではなくて、「神さま、あなたの知恵と力によってさせてください。」と言うのです。これまで自分の知恵や力に頼ってきた私たちが、そのようなものを捨てて、神の知恵と力によって生きて行こうとするのです。ですから、私たちは常に「神さま、私はこんな問題の中にあります。こんな患難の中にあります。どうぞ、あなたの栄光を現わすことができるように私を助けてください。」「職場にこのような人がいます。どうぞ神さま、私があなたの助けによってあなたに喜ばれる態度をもって接することができるように。あなたが喜んでくださることを考えることが出来ますように。あなたが喜んでくださることを語る事が出来ますように。どうぞ私のすべてを支配して、私を使ってください。」と願うのです。そのようにして、私たちは全能の神に自らをゆだねて行くのです。そうするとき、神は私たちを通してご自身のみわざを為してくださり、そのときに、周りの人たちは私たちのうちに働いておられる神を見るのです。ちょうど、マケドニアの教会がそうであったように。パウロが見たのは、彼らのうちに働いている神の恵みだったからです。

私たちの信仰は人から誉められる価値など何ともありません。あなたの信仰はすばらしいなどと言われるなら、私たちは本当に恥じ入るばかりです。そうではありませんか？私たちの信仰は余りにも不完全であり、それゆえに、私たちはどれ程信仰者として神の前に失敗を重ねていることでしょうか。しかし、驚くべきことは、このような私たちが神が用いてくださっていること、このような私たちを変えてくださっていることです。ですから、私たちの信仰ではないのです。このように不完全な信仰者を変えてくださっている神が、人々の前で誉められて行かなければならないのです。そこに栄光があるべきなのです。そこに栄光を帰すべきです。パウロは分かっていました。「私が弱いときにこそ、私は強いからです。」、私の自我が無くなるほどに私は強くなる、なぜなら、神の力によって私は生きるからと言います。信仰者はどのように生きるべきなのか、彼はそのことがよく分かっていたのです。これまでの自分の知恵や自分の力ではなく、神の知恵と力によって生きて行きたい、神の恵みによって生きて行きたいと。パウロは神の助けをいただきながら毎日を生きようとしました。それは患難のないときも患難のあるときも同じことです。

今、パウロが私たちに教えてくれたことは、このようにどのようなときでも主を見上げて歩んで行くなら、私たちは変えられて行く、私たちの人柄は変えられて行く、私たちはもっと主に似た者へと変えられて行くということです。どんなときにも、その問題によって喜びが奪われることはない、私たちは困難の中でも喜び、神の平安を楽しみながら喜びながら歩んで行く者に変えられて行くのです。パウロはこのように生きました。大変な問題の中で喜び、感謝していました。何というすばらしい生涯を送ったことでしょうか！でも、それはパウロの力でもパウロの知恵でもありません。その人生は神の力を世に証しながら、そのすばらしさを証しながら生きたのです。なぜ、彼はそのような人生を過ごせたのでしょうか？患難の目的を知っていたからです。「この患難は私のためだ、愛する主が私のために与えてくれているのだ。だから、私の責任は、この私を愛して私のためにすべてを捨ててくださった主を見上げて、その方を信頼して、その方に従って行くことだ。」と。

でも、私たちはそのことを頭で分かっている、実践することはなかなか難しいことを知っています。神のみこころを待ち続けるということは大変です。私たちは忍耐がないからです。求めたらすぐに答えを要求する者です。待つことが大の苦手です。ですから、神のみこころよりも自分の考え、自分の計画を優先してしまおうとするのです。そのようにして失敗した人物が聖書の中にもたくさん出て来ます。その中の代表的な人物、イスラエル初代の王様サウルを見てみましょう。サウルは主を信頼することよりも自分の判断を優先した人物です。神の約束を信じて忍耐をもって歩むのではなく、その忍耐をもてなかった人物です。サムエル記第一13章に記されています。ご存じのように、ここでサウルが犯した大きな罪は、自分で全焼のいけにえをささげたことです。なぜ、そこに至ったのでしょうか？自分が考えているように物事が進まなかったからです。13：8から見てください。「サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。それで民は彼から離れて散って行こうとした。：9

そこでサウルは、…」と、つまり、サウルは現象を見たのです。民が取ろうとしている選択を見たのです。自分から離れて行こうとする様子を見たのです。そうすると恐ろしくなったのです。しかも、サムエルがやって来ると言ったのにその日に来なかったのです。彼の心はさらに動揺しました。9節の続きから「…全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って来なさい。」と言った。こうして彼は全焼のいけにえをささげた。:10 ちょうど彼が全焼のいけにえをささげ終わったとき、サムエルがやって来た。サウルは彼を迎えに出てあいさつした。」、全焼のいけにえをささげ終わったときにサムエルがやって来たのです。11-12節「サムエルは言った。「あなたは、なんとしたことをしたのか。」サウルは答えた。「民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。:12 今にもペリシテ人がギルガルの私のところに下って来ようとしているのに、私は、まだ主に嘆願していません」と考え、思い切って全焼のいけにえをささげたのです。」、このようにサウル王には恐れがあったのです。敵がやって来るし自分の見方は逃げて行こうとする、その上、サムエルは約束した日に来ない、これは大変だ、自分で何とかしなければと「思い切って全焼のいけにえをささげたのです。」。そこで13節「サムエルはサウルに言った。「あなたは愚かなことをしたものだ。あなたの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。」、サムエルはここでサウルの大きな罪を指摘しそれを非難しています。その罪とは主が命じた命令を守らなかったことです。サウルはなぜ守らなかったのでしょうか？人間的な恐れからです。そして、神が言われたことを疑い、それを信じなかったのです。自分勝手な判断をしてそれを選択したのです。そして、それに対して主はサムエルを通して「あなたは大きな罪を犯した」と言われたのです。

私たちも気をつけなければいけません。皆さん、状況が自分の思い通りに進んで行かない、また、直面している問題が余りにも大変なとき、私たちは神のみこころを待つよりも自分で物事を選択してしまいます。神が望んでいることは「どんな時にでもわたしを見上げて、みことばに従順に従って来なさい」ということです。言い方を変えると、「わたしについて来なさい、疑うことなく信頼してついて来なさい」ということです。しかし、悲しいことに、サウルはそれが出来なかったのです。そこで主はサムエルを通してこのように言われました。14節「:14 今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命じられたことを守らなかったからだ。」**「主はご自分の心にかなう人を求め」**、主はご自分の心にかなう人を求めていると言うのです。ここで使われている**「ご自分の心にかなう人」**ということばは、「従った、一致した、同じ心」という意味です。神はご自分の心に従う人を求めていると言うのです。ご自分の心と一致した人、同じ心をもった人を求めていると言っているのです。サウルはそうではなかったのです。主と同じ心をもっていなかったのです。神のみこころに従って行こうとしなかったのです。

あなたはどうですか？神のみこころを第一にし、そのみこころに喜んで従おうとしておられますか？神がすぐに答えをくださらないので、あなたは神に失望していませんか？神は忘れておられません、神はあなたの必要をご存じです。神はあなたの必要を満たすと言われています。私たちはその神を信頼してその神に従い続けて行くことです。答えは今来なくても、神は必ず最善を為してくれることを信じて従い続けることです。問題がすぐに解決しないからと言って、神を疑うのではなく、問題が解決しなくても、その問題に勝る平安と喜びをあなたに与えてくださる、それが神の約束です。聖書のどこを見ても、神に信頼するなら問題が解決するとは書かれていません。なぜなら、問題は私たちにとって必要だからです。喜べない状況で喜ぶことが出来るから、喜びの源である神が私たちを通して世に明らかにされて行くのです。平安をもてない状況で平安をもてるから、平安を与えてくださっている平安の源の神が世に明らかにされて行くのです。神は私たちに問題のない人生を約束していないし、神に依存するなら問題から解放されるとは言っていない。神の約束は、その問題の中であって、あなたが神の祝福を喜びながら生きることが出来るということなのです。

でも、悲しいことに、その祝福を経験しないで生きている人がたくさんいるのです。なぜなら、神を信頼していないからです。神のみこころを本当に求めていないからです。神のみこころよりも自分の考えに頼って歩もうとしているからです。皆さん、神が望んでいるのは神に喜んで従う者です。神のお心と同じ心をもった人を捜しているのです。「主よ、私はあなたに従います。あなたのみこころが私の一番の望みです。どうぞ、私がしっかりとあなたのみこころを求めて歩んで行けるように助けてください。」と、そのような祈りをもってあなたは歩んでおられますか？それが信仰者であるあなたの生き方でしょうか？もし、そうでなければ神のあわれみによってそのような歩み方に変わることです。

もう一人紹介しなければいけません。この人はサウルと違って主を信頼して歩んだ人です。あのヨセフです。大変な苦しみを経験しました。自分の愛する兄弟たちからいのちを狙われ、奴隷として売られてしまうなど悲しいことです。しかも、パロの廷臣ポティファルのところに売られていったヨセフ、神の前に喜んで従っていたのでポティファルの妻に言い寄られても、自分の身を正しく清く守ってしまし

たが、今度は無実の罪で投獄されてしまいました。「なぜですか？神さま、私はあなたに喜ばれることをして来たのに、なぜ、このような目に会うのですか？」と、そのようにヨセフは考えたでしょうか？そこに王の献酌官長と調理官長が送られて来ました。ヨセフは彼らの夢の解き明かしをしました。その通りに献酌官長は解放されました。「きっと私を思い出してください。」とヨセフは頼みましたが、彼はヨセフのことをすっかり忘れてしまったのです。ヨセフは待ったことでしょう。今週中に解放されるかもしれない、一週間が経ち、ひと月が経ち、半年が過ぎとうとう1年が経ってしまった。でも、何も起こらない。絶望したことでしょう？「神さま、いったい、どうなっているのですか？」と。2年の歳月が過ぎました。驚くべきことは、その2年目にパロが夢を見るのです。そのときに王の献酌官長はやっと「私はきょう、私のあやまちを申し上げなければなりません。2年前に、私の夢を説き明かしてくれた人がいました。」と言ったのです。つまり、2年間の神の沈黙は神のみこころだったのです。ヨセフはこのように思ったかもしれませんが。「もっと早くに、こんなところから出してもらいたかった」と。でも、神はヨセフに2年間そこで過ごすことを良しとされたのです。自分の思う通りに物事は進みませんでした。でも、このヨセフはこのような証を自分の兄弟たちに対してしています。創世記45章にそのことが出て来ます。ヨセフが兄弟たちに自分のことを明かしたときのことです。45：4-8「**ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか私に近寄ってください。」**彼らが近寄ると、ヨセフは言った。「**私はあなたがたがエジプトに売った弟のヨセフです。：5 今、私をここに売ったことで心を痛めたり、怒ったりしてはなりません。神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてください。：6 この二年の間、国中にききんがあったが、まだあと五年は耕すことも刈り入れることもないでしょう。：7 それで神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。：8 だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。神は私をパロには父とし、その全家の主とし、またエジプト全土の統治者とされたのです。**」、ヨセフは確かに兄弟たちが悪を行なったことによって大変な苦しみに会いました。大変な困難、悲しみ、苦しみ、そして、期待を裏切られることもたくさんありました。その中でヨセフは忍耐を学び、練られた品性を身に付けて行ったのです。そして、いつもその背後におられる主権者なる神を見ていたのです。ですから「**神はいのちを救うために、あなたがたより先に、私を遣わしてください。**」と言ったのです。神がすべてのことを導いておられる、そして、神がそのみこころによって私をこの地に置いてくれたと。ヨセフの信仰は周りの状況によって惑わされたり、それによって動揺するものではなかったのです。その背後にいる神を見ていたからです。サウルは周りの出来事に動揺しました。そして、神を信頼することをしなかったのです。

あなたはどのような信仰をもって日々歩んでおられますか？パウロが今日、私たちに教えてくれたこと、それは「私たちの成長には忍耐が必要だ」ということです。そのために神は患難を与え、それによって忍耐をもたらししてくれるのです。そして、その忍耐が私たちをよりキリストに似た者へと変えて行くのです。だから、忠実に歩み続けて行きなさいとパウロは教えるのです。信仰者の皆さん、あなたがこの神の約束に立って生きるかどうか、それはあなたが考えなければいけません。でも、言えることは、神はこのように神の約束に立って生きる者たちを喜んでくださるといことです。なぜなら、見えるところによって歩むのではなく、神のおことばに立って、神の約束に立って、神を信頼して生きる、そのような信仰者こそ、神が探しておられる人々だからです。神と同じ心をもった人、ご自分の心にかなう人です。あなたがそのような人であることを心から望みます、もし、そうでなければ、今、あなたはその不信仰の罪を悔い改めて、主のみこころに従う者に変えていただくように祈るのです。そして、今日からそのような歩みを始めることです。神が私たちに望んでおられることは神と同じ心をもってこの方に従い続けて行く人です。神のおことばにかなう人、そのような人になりたいものです。そして、そのような人になるために必要なものが「忍耐」です。しっかり主を見て、信仰者として勇敢に歩み続けてください。そのときに、主があなたのすべてを通してみこころを為されます。